

令和5年度 第3回 中部森林管理局 国有林材供給調整検討委員会
(概 要)

1 開催日時

令和5年12月7日(木) 13時05分～15時00分

2 開催場所

ウッドリンク株式会社 会議室

3 検討内容

- (1) 国有林材供給調整対策について
- (2) その他

4 検討結果

全国的な木材需給動向をみると、昨年以降木材価格は下落傾向にあり、荷動きも悪い状況となっている。また、プレカット工場の受注量は、10月は前年並みに持ち直していたが、11月は再び下落に転じた。非住宅分野は好調との声もある一方で、戸建て住宅は活気が無く、持ち直しは当面難しいとの見方もある。

中部局管内の原木価格に目を向けると、直近3か月では概ね横ばいで推移しており、一部の原木市場・樹種でウッドショック以前の水準に戻っている状況が見られるものの、全体的にはウッドショック以前と比べて、高値で踏みとどまっている。ヒノキについては、米マツの代替需要により、価格が上昇傾向に転じている地域が見られる。

こうした状況を見据え、中部局管内では、引き続き本年度計画している製品生産事業を着実に実行し、市場等への速やかな木材の供給を行うことにより、管内の市況の安定化を図ることが重要と考える。また、供給調整の判断基準と照らし合わせても、定常範囲を大きく逸脱している状況にあるとは言えない。

よって、現時点において、直ちに国有林材の供給調整を行う必要性はないと判断する。

5 主な意見

○今年は台風等による影響がほとんどなく、素材生産は昨年並みで順調に進み、過不足なく横ばいで推移している。ヘリコプター集材が佳境に入り、これからも安定的に供給できる見込み。

第2四半期以降、円安・物価高による全国的な住宅着工減少の影響で、製材品の生産量は漸減状態である。木材市場も厳しい状況が続いており、直近ではカナダの森林火災や中国木材のベイマツ製品の受注制限などの要因により、輸入材在庫が減少している。木曽谷の原木市では、土台取りの並材を中心に相場が底打ちして、原木価格に2千～3千円の反発が始まっている。ただし、ウッドショック時と異なるのは、需要

が薄いことである。

1年前より原木価格が下がり、全国的に山からの供給量が減っている。これにより、今年10月頃からは原木価格の上昇が始まっているが、製材品価格に反映されていないことが、最大の課題である。天然木については、コロナ禍以降、社寺仏閣用材や神輿等の修繕などの需要が少し出てきていると感じる。

○製材工場への原木需給バランスについて、岐阜県では6月頃からの需要動向を見て、生産現場の事業地を変更しているところが多く、その影響で第4四半期の計画に向けて原木が足りなくなると危惧している。製材工場が第4四半期にどれくらいの規模で稼働するかにもよるが、冬期は伐採量が減ってくるので、原木需給バランスを取るの厳しくなると考えている。

ウッドショック時よりも製品単価の変動は小さくなってきおり、それに合わせて原木単価も動いてきた。A材について、岐阜県内の製材工場では原木単価と製品単価のつり合いは取れている。B材については、出材量が減ったことである程度バランスを取れるようになってきた。C・D材については、製紙工場やバイオマス工場が、県境をまたいで材の取り合いになっている。

中国木材の火災以降、ヒノキの土台が不足しており、地元の工場からは増量の希望も出ている。四国・中国地方ではヒノキ原木が不足しており、その影響が中部地方にも生じているという話も聞いている。ヒノキ4mの需要が高かったため、4m造材に切り替えた結果、3m材が不足気味になっている。

○国有林の事業については、雪の多い地域もあるため、1月を目途に追い込みをかけている状況。若干遅れている地域もあるが、全体的に順調に進んでいる。今後は民有林での事業に移り、民有林からの出材が増えてくると思われる。

大型工場の生産調整によって、北信東信地域のカラマツの動きが弱く、国有林での事業の追い込みが重なり、11月から在庫量が増え始めている。市売りでは、今はストック機能を重視して動いており、冬期はカラマツのストックヤードとしていきたいと思っている。ただ、合板価格が1500円を切り、原木にどれだけ影響があるか懸念している。

○特に関東の方でC・D材や広葉樹を扱う会社が増え、中部方面にも流れてきており、関東・中部圏ではバイオマス需要が堅調に推移している。岐阜県の方で新しく大型製材工場ができるという話を聞いており、安定供給の面でどう推移していくのか心配している。原木価格が下がったことで、素材生産だけをしているような会社が生産調整をしている。林ベニヤが1月から価格調整で単価を下げるという話も聞いている。その上でまだ生産調整をしているので、今後も厳しく入荷量を制限する可能性もある。素材生産業者は、原木価格の変動を気にしており、今は生産を抑えている。C材を扱っている会社では、ほとんど在庫が無くなり始めており、出材の要望も出ているが、素材生産はすぐには動けないので、C・D材もすぐには出せない状況。国有林の生産事業からは安定的に供給されているが、その他の素材生産業者は生産調整により不安定な状況となっている。

○9月～11月の原木在庫量が昨年比で半分ほどしかない。本来であれば、原木入荷が減少する冬期に向けて貯めていく時期だが、むしろ減ってしまっている。今年は暖冬だと聞かすが、どうなるか心配。

ヒノキの3.5寸角柱が順調で、4寸角柱は苦戦しているという話があるが、スギも同様の状況。なぜかと言うと、住宅単価が上昇し、住宅メーカーは単価を抑えるために、4寸角柱から3.5寸角柱への変更提案をすることがあり、それが要因の一つとなっていると考える。マーケットがどのように動くのか、対応を間違えると全く売れない物を作っていたことになってしまう。山側でも、4寸角の径級は土台用として4mに、3.5寸角の径級は柱用として3mに造材するなどのきめ細かな対応も必要になってくる。

○4寸角柱を3.5寸角の価格で売っているような話も聞いており、市場でも3.5寸角が9割となっている。4寸角を勧めるような施策を取らないと、原木需要も細物ばかりになってしまう。

自社の売り上げは、対前年比で見ると10月は良かったが、11月になると90%前後に落ちてしまった。プレカット工場も非住宅を受注していかないと仕事が回ってこない状況。

今後は花粉症対策でスギの皆伐が増えるが、そうすると市場には今までより多くの材が出てくることになり、それが一度に出材されると需給バランスを維持できるのかを危惧している。